

改築して立派になった衆院第一議員会館二階。ほとんど人気のないこの委員長室フロアの最奥に、記者たちがポツリポツリと取材に訪れる一角がある。

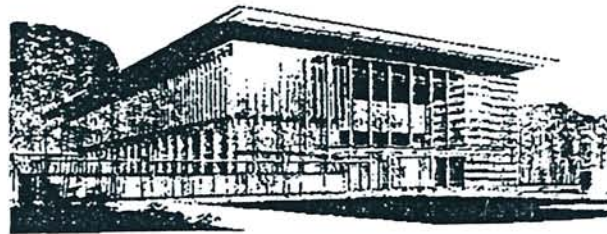
衆院政治倫理審査会会長室。いかめしい名札の部屋に、その主である異形の人物はいた。

村上誠一郎(六十一歳)。衆院議員当選九回。愛媛県選出。村水上軍末裔十八代目の当主を自任する。特徴は、多分水田町一のウエスト(腰回り)というか、優に百キロを超える巨体と、膝を痛めないよう二本の杖をストック代わりに歩く姿だ。昨年末成立した特定秘密保護法を「安倍(晋三首相)の趣味」と切り捨て、自民党でたった一人衆院本会議採決を棄権したことからマスコミ界での存在感を高めた。

与謝野馨以上の政策職人でもある。データを収集、チャートを作り、自ら分析して、あらゆる政策について自らの回答を準備している。スタンスは、財政・経済、外交・安保政策いずれも徹底した保守リベラルだ。安倍政権のジャブジャブの金融緩和、右寄り外交、原発再稼働路線にはとても賛成は

## 政界スキャン

連載…………… 348



# 自民党リベラル「たった一人」の反乱

村上がこれほどまではやされるのも、自民党内でリベラルと呼ばれる勢力が急速に退潮しつつあることと無縁ではない。吉田茂、池田勇人、大平正芳、宮澤喜一、加藤紘一ら綿々と続いてきた伝統を知るものからすれば何とも寂しい限りである。

それにしても、輝ける自民リベラルの歴史はどこに消えてしまったのか。安倍路線は我々を一体どこに連れていこうとしているのか。現代の政治的絶滅危惧種の警世の弁に耳を傾けてみよう。

\*

「僕は、この正月、例年に増して地元回りをがっちりやった。なぜだかわかりませんが、四割の得票率で七割の議席取って驕った自民党に対し、次の選挙は厳しい。必ず揺り戻しがある。それも倍返しで来る可能性が高い」

「今の安倍政権は、橋本龍太郎政権の初期と似ている。通産(現経済産業)省支配だ。首相首席(政務

担当)秘書官に橋本政権は通産官僚の江田憲司(現結いの党代表)を、安倍政権は経産官僚の今井尚哉をあてた。通産省というのはある意味、はったりと勢いだけの役所だ。アイデアと法律案は出してくるが、一割打者で確実性がない。あんな無茶やっていると必ず大変なことになる」

無茶、というのは、アベノミクス三本の矢のことを指す。

曰く。第一の矢である金融緩和は、肝心の設備投資や賃上げに回っていない。なぜならば、日本企業は依然として設備過剰状態にあり、企業の内部留保二百兆円がそれを物語る。むしろ、カネは株、不動産の資産ミニバブルをもたらしており、この破裂によるマイナス効果かむしろ懸念される。

第二の矢、財政出動も効果なし。タコが自分の足を食いながらカンフル注射しているようなもの、という。すでに日本の財政悪化状況は戦争中の最悪時の相似形となっ

できず、齒に衣着せぬ政権批判を続けている。

もちろん、政権からは鼻つまみ者扱いだし、アベノミクス賛歌一色の自民党内でも、浮いた存在になっっている。

逆に、社会部記者からの人気は高い。直木賞を受賞した山本兼一の小説「利休にたずねよ」をもじって「村上にたずねよ」との業界用語ができたくらいである。

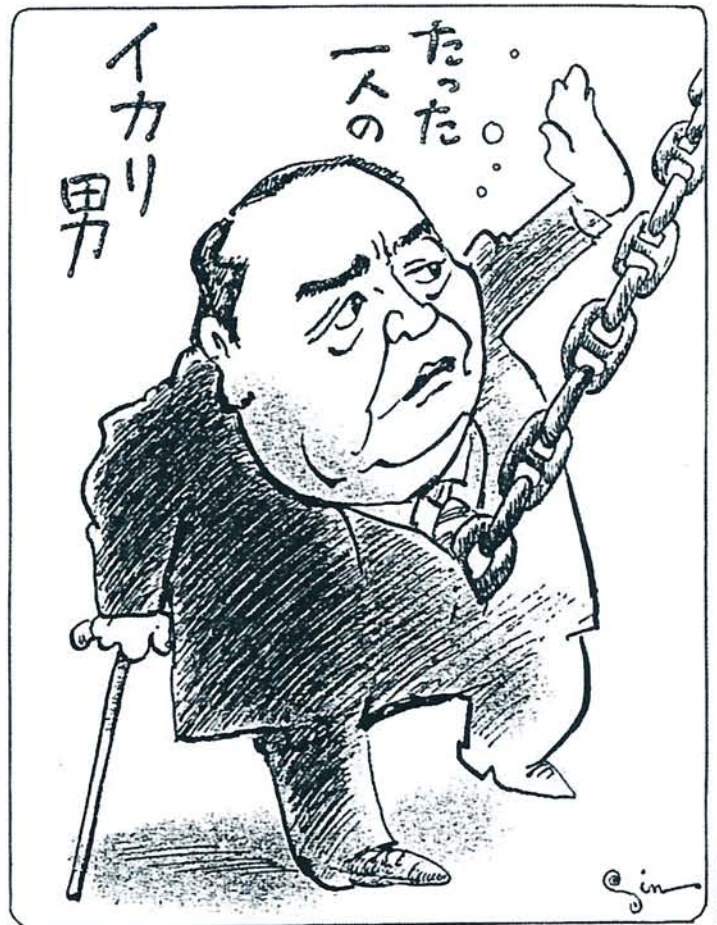
ており、この先「日銀の赤字国債引き受け」との認定をマーケットに下されると、長期金利のみが上昇し、財政、金融、景気がいずれも致命的な打撃を受け、まさに大変な事態に発展しかねない。

第三の成長戦略も小粒なものばかり。一割打者の宿命か。スローガンだけはいいが、地についた政策は一つもない、と酷評する。

安倍の強硬一点張りの外交・安保政策も気に入らない。特に中韓近隣諸国との関係悪化を嘆く。

「歴史から何を学ぶのか。ピスマルクは、普仏戦争の前にオーストリアと戦争して勝っている。だが、それに驕らず翌日ウィーンに凱旋行進という時、ただ一人それをやめさせた。オーストリアに必要以上の敵愾心を持たせてはいけない、という判断だった。結果的にオーストリアは参戦せず普仏戦争に勝つことができた。政治指導者というのは先を読んだ対応が必要だ。自分の感情を優先するだけでは国民を不幸にする」

靖国も然り。「相手の頭をはたいて、いつでもこちらのドアはオープンです、といっても誰も付き



山田紳

合ってくれない。私も肉親がインパール戦争で死んだ。靖国のことを他国に言われたくない。しかし、日中の民間貿易なくしてアベノミクスの達成ができるのか。全体構図を誰も考えてない」。

原発政策も開明的だ。自民党「福島原発事故究明に関する小委員会委員長」として再稼働より福島対策を優先すべきだと主張、党内で結論を先送りしている核燃料サイクルについても店じまいに舵を切るべきだ、と明言する。

議する中で、にわかには蘇ってきた、というのだ。

\*

秘密保護法制といえ、二十六年、自民党内でスパイ防止法を制定すべしとの議論が盛り上がったものの、それは民主主義になじまないとする中堅・若手リベラル議員の猛反対により法制化に至らなかったことがあった。「中央公論」一九八七年四月号には、谷垣禎一、大島理森、佐藤栄佐久、杉浦正健、白川勝彦、鳩山由紀夫、谷津義男、村上の八人が反対論を寄稿している。

あれから四半世紀。谷垣と大島は内閣・党の重鎮として発言をせず、他の五人はすでに議員バッジをはずしている。若手・中堅議員でその路線を継ごうという者はおらず、村上がたった一人の反乱を演じるのみである。

どうも自民党もバランスの悪い政党になったものだ。村上の奮闘を期待するとともに、自民党の外にリベラル勢力の育成、結果を求めたい。どの政党がその使命を背負うのか。次の政界再編はそれが軸になるのではないか。(敬称略)